

朝食会講話シリーズ
vol. 327

世界で唯一」の女子プロ野球リーグ



(株)日本女子プロ野球機構 代表取締役

片桐 論

Amagasaki Club



(株)日本女子プロ野球機構 代表取締役
片桐 論 (かたぎり さとし)氏

略 歴

昭和 5年 4月	大阪市和泉市で生まれる。
平成 4年 4月	清風高校入学
平成 7年 4月	関西大学社会学部入学 在学中にブラジルへ渡航
平成 12年 4月	広告代理店入社
平成 21年 8月	(株)日本女子プロ野球機構 設立
平成 22年 4月	日本女子プロ野球リーグ開幕

はじめに

おはようございます。日本女子プロ野球機構の片桐と申します。

「女子プロ、女子プロ」といって、放送局の受付で、体格だけ見てよく「女子プロレス」と勘違いされますが、「女子プロ野球」ですので、誤解のないよう よろしく願います。

では、はじめに「世界で唯一の女子プロ野球リーグ」ということで我々は活動させていただいておりますが、「女子野球の現状というものは一体どうなのか」というところを、まずお話させていただきたいと思えます。

競技人口ですが、「なでしこジャパン」の大躍進により 女子サッカーが非常に注目されておりますが、女子サッカーの人口は、50000人とも40000人とも言われております。

それに対して、女子ソフトボール人口はどれ位なのか。北京五輪以降オリンピック種目からはずれて久しいのですが、まだまだ女子のソフトボール人口というのは46000人で、女子サッカー・女子ソフトも40000人以上いて、双璧をなしているところなんです。肝心の我が女子の硬式野球の人口といえますと、約700人です。この数字は、女子だけで活動するということでございますので、男子に混じって野球をやっている女の子であるとか、もう少し多いと思われます。あと、女子の軟式野球人口は約3000人で、合わせても4000人に到達するかしないかというところでございます。

この人口格差が生まれた部分での原因としまして、女子の公式野球の受け皿が非常に少なく、ヤングリーグ・ボーイズリーグ・シニアリーグ・少年野球でも、女子の受け皿ということで、男子に混じってするところ非常に支援していただいているんですが、やはり中学生くらいから体格の差がどうしても生じ始めて、なかなか野球を続けていくことが出来ない状況です。

いずれにせよ、女子が野球を続けていくキャリアの上で、受け皿が少ないという現状があり、大きな課題でございます。

ただ、これを逆に考えますと、女子の硬式野球、特に高校で、受け皿の改善できれば、競技人口の増加の可能性はとて大きいと言えます。

では次に、女子の高校の硬式野球の受け皿というのはどうなっているのかという現状ですが、いま全国で6校しかありません。

全国に6校しかなく、関西では唯一、チームとして活動できる状態にあるのは、京都の北部の福知山成美高校一校であります。

それに比べて、男子の高野連加盟校数は、昨年末時点で4119校で、非常に受け皿が多くあります。

因みにですけども、女子の高校のサッカー部はどれ位あると思われますか。

実は62校なんです。

野球という競技とサッカーという競技で、よく関係者の方も言われますが、「サッカーはボールひとつあったら出来るよね」と。

野球に関しては、「やっぱりグラウンドであったりとか用具であったりとか、人数であったりとか、非常に制約が厳しい競技になってくるよね」、指導者が必要だよね」と。これがすべてではないですが、格差が開いてしまっている原因がこういうところにもあると思われます。

続きまして、女子の硬式野球チームは、どの様に日本中に分布しているのかというところですが、一目瞭然で、関東が非常に盛んであるという事が見て取れます。

やはり下支えしていく部分において、一番大切な受け皿の高校の数が、やっぱり関東が多いです。

少し見難いかもしれませんが、埼玉には、花咲徳栄高校と埼玉栄高校の二校があり、東京には蒲田女子高校と駒沢学園女子高校の四校があつて、大学も尚美学園大学、平成国際大学の二校が埼玉にあります。高校で活動した選手が、さらに上を目指して野球をする環境をつくりたいと思ったときに、それぞれの大学で創部の動きが活発になっております。

と言いながらも、まだ関東にもまだ二校しか大学はないんですけれども、それ以外に、緑色で、クラブチームも存在しております。

ただ、競技人口、競技団体としては関東に集中はしているものの、その先行している関東ですら、職業というか実業団的なチームはなく、高校の部分で改善されても、なかなかその先、生業として生活しながら野球が出来るという環境が、必ずしも整っているわけではないという現状があります。

ただ、やはり野球という素晴らしい競技において、女子が活動していく中で、将来目指す目標というものをつくり、本当に安心し、野球をしながらトップレベルを目指せば生活も出来るんだ」という夢を持てるリーグを作るため、日々活動させていただいております。

嬉しいことに、元々関東と九州の一部、関西の一部という少し偏った形での競技分布だったんですけれども、リーグ発足後、西日本の方でも中学校・高校のチーム、クラブチームが誕生しはじめました。

全国的にも女子野球の芽が広がっている中で、特に四国の方ではもともとチームが少なかったんですが、高知県や徳島で女子だけが集まって野球をするという環境が、芽生え始めているという報告をいただきました。

これは我々にとっても、女子の受け皿をつくっていく、プロだけではなくて、競技過程の中でそれぞれの中学・高校・大学・クラブチームと、受け皿をつくっていく部分においては、非常に僕らの背中を押し

てくれる動きが広がりがつつあるという事でございます。

全国に分布している女子のチームの主な大会で、年間スケジュールというものが有り、男子と同じように春の選抜、夏の選手権大会と同じ時期に高校の大会が開催され、先ほどの六校プラス地元のチームが合同のチームをつくって大会を行っております。

高校の大会はそういう形ですが、女子野球の多い関東では、読売巨人軍さんが後援をされている「ヴィーナスリーグ」というアマチュアのリーグがあり、高校・大学・クラブチームが参加して、春と秋にリーグ戦を行っております。我々のチームにも、ヴィーナスリーグ出身の選手が多く在籍しております。

八月の月上旬に、全国のチームが一同に会する大会が、野球の街、正岡子規で有名な愛媛県松山市の「坊ちゃんスタジアム」で行われております。

そして、去年の八月末に立ち上がった18歳以下の選手権大会、「ユース大会」というものが開催され、非常にチーム数も増え、年齢の階層も競技人口も増え始めているので、大会参加チームも自ずと増えてきているという現状です。

更に、西日本の方でもチームが増えてきましたので、各地域に一定数のチームが出来始めていることから、地域の大会、関西大会であるとか、九州大会が行われております。

ここでひとつ「中学校は中学校、高校は高校、大学は大学の大会はないの」と疑問に思われるかもしれませんが、っていうお話ですが、女子の硬式野球は、これからの競技でございまして、高校のチームと大学のチーム、もしくはクラブチームが対決したとしても、そこまでのレベル格差というのは生まれていない現状があります。

ですので、将来、プロリーグが頂点となって、Jリーグのようにきっちりとした競技のピエラルキーがつけられるよう推進しないといけないという使命も感じております。

冒頭で女子サッカーのワールドカップに触れさせていただきましたが、女子野球にもワールドカップがございまして。



女子のワールドカップは2004年から2年に1回開催されておりまして、ちょうど「ワールドカップ・イヤー」と呼ばれるのが来年になります。

直近の2大会に関して、2006年の松山の大会では8か国、アメリカ・カナダ・オーストラリア・韓国・香港・インド・チャイニーズタイペイ・日本が参加しました。2010年大会は、南米ベネズエラで開催され、参加国が11か国で、近隣のプエルトリコ・キューバも参加しました。女子野球ワールドカップは、確実に2年に1回行われています。特にナショナルチームにおいても、野球先進国という部分で、アメリカ・カナダ・オーストラリア・日本が牽引しています。

なでしこジャパンが今回ワールドカップで初優勝しましたが、果たして「日本の女子野球の実力」はどのようなのか。

なんと、女子野球の日本代表は、松山、ベネズエラの大会で優勝し、ワールドカップ二連覇中なのです。

先に行われた2004年と2006年の大会においても準優勝という成績を残していますし、日本の女子野球は強いんです。

なでしこジャパンで日本がフィーバーしていた時に、僕自身としては非常に歯がゆい思いをしていたところで、今日来ていただいた皆さんには、ぜひ、なでしこの話題が出た時に、「女子野球もワールドカップ二連覇してんねん」ということをお話いただけたらと思いますので、ご協力よろしくお願いします。

日本女子プロ野球リーグの概要

続きまして、日本女子プロ野球リーグについてのお話をさせていただきたいと思います。

リーグの概要としまして、リーグ誕生の経緯からお話させていただきます。

野球という素晴らしいスポーツです。当然、男子だけのものではないですし、男は野球、女はソフトボールという決めつけじゃなくて、当たり前のように、今日ご飯を食べたいと思ったときにいろんなものが選択肢にあるように、女子が野球をしたいと思ったときに、その選択肢として、ちゃんと素晴らしい野球という競技が出来る環境にしたいということと、何より先野球少女の夢の目標をつくりたいというところで、我々のリーグが誕生しました。もちろん、ソフトボールも素晴らしい競技です。

我々のリーグの活動を通じて、ひとりでも多くの人に女子野球の存在を知っていただいて、例えば、近所のバッティングセンターに行って女の子がいたら気に留めてもらって、応援してあげてもらったりとか、河川敷で野球やってて、「女の子いないかなあ」と気にしてもらったりとか、本当にもう一歩一歩なんですけれども、女子が野球をするということにおいて、皆さんの偏見という言い過ぎかもしれませんが

れども、珍しいものを見るような形じゃなくて、応援すべき存在であるという風に思っていたきたいなと思います。

たかだか700人の競技人口の中で、「なにがプロやねん」とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、けれども、どうしてこのリーグは立ち上がったのかというところを考えた時に、やはり女子野球という部分においての大きな旗振りをこのリーグはしていきたいですし、これから目指す女子の野球少女においても、「あのリーグが私の目指す夢の目標」というところを思ってもらえるよう、頑張らせていただきたいと思います。

リーグの理念ですが、五つございます。ひとつ目は、女子野球選手が目指す野球のキャリアの頂点になるということ。二つ目は、日本の女子野球のレベルを強化すること。現状強いんですけども、それを更に強化してより強くしていく。

三つ目は、リーグに所属する選手のセカンドキャリアをサポートすること。リーグとしては、今後の人生を考えた上でプロとして活動するということを大切にしたいと思います。女子野球を普及していくという部分で、いまリーグで活躍する選手が、今後引退したとき、指導者として自分の地元であったりとか母校に帰ってもらったりして、種をいっぱい蒔いてもらって芽を出すような活動をしたいと思います。その時に柔道整復師の資格を取得し、指導面や生計を立てる部分で活かして欲しいと思います。そのために、選手全員、兵庫と京都の専門学校にそれぞれ通っています。

四つ目は、女子野球の素晴らしさを少しでも多くの方に知っていただいて、女子野球の普及に努めること。

五つ目は、地域の人々との交流を深めて、絆を深めて地域活性化にも貢献していくこと。

リーグの運営体制ですが、運営会社としましては、私が代表を勤めさせていただく日本女子プロ野球がありまして、高校時代に甲子園を沸かせた太田幸司さんにスーパーバイザーを勤めていただいています。

あと女子のスポーツキャリアデザインという部分で、現参議院議員の橋本聖子さんに名誉顧問として色々アドバイスをいただいております。

その下には、皆さんに応援していただきたい「兵庫スイングスマイリーズ」とあとは京都を本拠地とする京都アストドリームスがございます。来年は、これに球団加わり、3球団でのリーグとなります。

ピックスとしては、京都アストドリームスは、初年度は元阪急の黄金時代を支えた大熊忠義さんに務めていただき、また、今年からは「ヨッシャー」でお馴染みの元近鉄の監督をされた佐々木恭介さんが指揮を執っております。現メジャーリーガーの福留選手を支えていらっしゃいますし、野球理論、指導理論を含めた野球哲学がとてもしっかりされています。

日本女子プロ野球リーグは世界で唯一、アメリカにもカナダにもオーストラリアにもなくて、日本だけに存在する唯一のプロリーグ、トップリーグでございます。

実際、その試合とルールはどうなのというところですが、これに関しては男子とまったく同じで、ピッチャーはピッチャーマウンドからホームプレートまでの18.44mも一緒ですし、あと塁間も一緒ですし、ボールは硬式球です。

バットにおいても、金属バットですが、大体野球をご存知の方であればお分かりいただけるんですが、900g位のバットを振り回す選手もいます。

今シーズンからは7イニング制を導入しまして、最大延長が9回。そして指名打者制を取り入れさせていただいております。7イニング制というのは女子の国際ルールであり、やっぱり世界を見ていくという部分も必要になってきますので、女子の国際ルールに準拠させていただいたことと、あと、試合をご家族でナイター観戦に来ていただいて、大体2時間でお帰しいただくという部分で、大体試合が六時から六時半から始まりますので、八時、八時半に終わって、十時までには帰れるという事で7イニング制を導入させていただいております。

あと、今シーズンの試合数および試合開催場所でございますが、公式戦は年間50試合。前後期制を敷いております。前期20試合と後期20試合、あと「シンデレラシリーズ」と題しまして、全国各地、南は福岡から北は北海道まで遠征させていただき、全国に広めていくという部分での遠征シリーズを10試合予定させていただきました。

今シーズン、そのシンデレラシリーズは合計10試合で行われ、五勝五敗のイーブンで、得失点差で兵庫スイングスマイリーズが優勝いたしました。

今は後期ですが、六勝六敗二引分けで非常にいい試合をしております。前期は兵庫スイングスマイリーズが優勝し、後期は非常に拮抗した優勝争いをしているというところで、前後期で優勝チームが異なる場合に、10月、シーズン終わりに優勝決定戦を行う予定です。

では、皆さんも興味がお



ありと思いますが、肝心の選手の生活というのはどうなっているのかという部分を、ご説明させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

昨年リーグが誕生した時に、フジテレビのすぽるとで特集されたVTRがございますので、是非ご覧ください。

VTR(約8分間)

日本女子プロ野球リーグの現状

2010年、昨シーズン、今年からは2シーズン目に入っておりますが、去年のプレーバックとしまして、先ほどVTRの中でもありましたが、去年の4月23日にリーグの記念すべき第一シーズンが始まり、公式戦、全4試合、前後期2試合・2試合、どちらも兵庫スイングスマイリーズが圧勝で優勝しました。これは当然予測していたことではありますが、僕自身としては、どちらのチームも拮抗した形で、2チームしかないんで、バランスのいい試合をして欲しいなという風に思っておりましたが…。しかし、これは真剣勝負。結果的に兵庫スイングスマイリーズの2勝1敗3分、7割以上の勝率を誇ったというところで、非常に胃の痛いシーズンでありましたが、お陰さまで観客動員の数も、延べ61424人の方にお越しいただき、昨年最多観客動員試合は京セラドームでの502名でした。

肝心の勝負の2シーズン目なんですが、今年4月2日、同じくわかさスタジアム京都・西京極球場でシーズンをスタートしまして、成績としましては、前期も兵庫スイングスマイリーズが三期連続で優勝しました。

ただ、ここで注目いただきたいのは、11勝9敗0引き分けというところで、京都のレベルのアップ。監督が変わったことありますが、非常に拮抗した展開で、最後の最後までもつれて、非常に面白い試合が行われました。



シンデレラシリーズ、遠征シリーズも兵庫スイングスマイリーズが優勝しましたが、5勝5敗、得失点差で兵庫スイングスマイリーズが上回ったというところで、非常にレベルは拮抗して、面白い試合をしています。

観客動員数、現時点なんですが6921人で、これは試合の数が違うので、一概には言えないんですが、二年目は特に苦しくなるだろうと思われたんですが、前年の一試合平均の1536人に対して1648

人ということで、微増というところと、最多入場者数、最多入場者の試合というのが5125人ということで、これも僅かではございますが、去年の京セラドームをクリアすることが出来ました。

去年は、圧倒的に兵庫スイングスマイリーズが優勢だったんですが、今年は非常に接戦が多くなってきて、おもしろい試合が行われております。

皆さん、女子野球ということを知られた時に、とあるプレーが出ているのかというところでたくさんご質問をいただきますが、今シーズン、女子野球界に残るプレーが、女子野球選手のプレーの進歩を印象づけるプレーが、何と出ました。

VTRを見ていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

VTR(3分)

第1号ホームランが、柵越えのホームランが誕生したんです。

やっぱりプロ・アマを問わず、女子野球を見てきた人間、支える人間からすると、このリーグを立ち上げた女子野球リーグの発展ということも踏まえてなんですが、非常にこの第一号というのは、プロもアマも、女子野球に携わる人間自体が、やはり夢見てきたワンプレーというところで、このリーグの魅力としては、やはりこういうこれから伸びてゆく競技、今までそういう環境がなかっただけで、伸びてなかった競技自体の、ひとつひとつ階段を皆さんと一緒に登っていけるというところが、非常に僕自身としては皆さんにお伝えしたい部分であり、応援していただきたい部分であると思います。

僕自身、全部の試合に行ってるんですが、ちょうどアメリカで独立リーグとマイナーリーグの視察に行く為に、まさに渡航準備をしているときに第1号が出たというところで見届けることは出来なかったんですが、非常に嬉しい出来事でした。

運営での工夫

日本女子プロ野球リーグは、女子プロ野球だけを応援してもらっている事だけでなく、女子野球自体を応援していただくという部分で、リーグの運営として幾つか工夫させていただいております。

まずひとつ目は、先ほどのVTRでもありましたが、ファンと選手の距離を近くに置く。

女子野球選手が、やはり応援すべき存在であるということを持っていただくためには、一番には親しみが必要であるということを考えたので、試合後のサイン会であったり、試合前、前後の野球教室であったり、あと男子のプロ野球ではなかなかないですけども、試合の途中に、選手がお客さんに対して後半に向けてどの様にして頑張っていくのかというところを呼びかけさせていただいたり、あと試合後に

球場清掃をお客さんと一緒に行ったりということで、少しでも選手とファンの距離を近くにするということを工夫させていただいております。

あと、当然使わせていただく球場自体、男子のプロ野球の球場のようにビジョンがなかったりとか、音響設備が整ってなかったりという部分がありますので、選手を知っていただくという部分においては、全選手分の選手マンガを全選手分つくって、お客さんに配布させていただいたり販売させていただいたりしております。

あと情報発信メディアの活動というところで、ウェブ中心になるんですが、特にパ・リーグさん、ソフトバンクさんであったりとか西武ライオンズさんが活用されているんですが、なかなかこのご時世、広告出稿量も減ってきていますので、放送局さんも「女子野球自体はおもしろいけれど、中継の枠を取ったりとか、オンエアをすることがなかなか難しい」ということもございますので、これは待っているだけじゃなくて、自分たちで情報発信をしていこうというところで、フェイスブックであったり、ユーチューブというウェブの動画配信の生中継をさせていただいたり、あとユーチューブも活用しております。

先ほどの小西のホームランもそうですが、試合のダイジェストを流させていただいたりして、そこにお客さん、観ていただく方を呼び込むためのブログであったりツイッターであったりという風な工夫もさせていただいております。

今後の課題と取り組み

あと女子プロ野球リーグが苦労したこととしまして、球場の確保がなかなか難しいというところで、これは観る側の立場からすると非常に当たり前のことですが、なかなか専用球場、自前の球場がないものでして、市民球場さんをお借りしたりしないといけないという状況です。

その中には、市民球場ということの上には、やはり地域の市民の方の利用開放であったりとか、そこを拠点にされている優先利用での野球団体がありますので、なかなかフル稼働している中で、更に女子プロ野球のために球場を割いていただくというのがなかなか難しいというところでもございました。

特に初年度は、大きなトラブルというか、現「ほっともっとスタジアム」の、グリーンスタジアム神戸のサブグラウンドを押さえさせていただいたんですが、お客さんの収容人数が600位しか入らないところを押さえさせていただいて、それまでの観客動員が大体2500人くらい誇っていたので、お客さんが入らない球場を押さえてしまっていました。

ただ、これは球場を押さえる物理的な問題もあり、難しく、その代わりその球場を全部キャンセルさせていただいて、京セラドームであったり、ナゴヤドームであったり、神宮球場であったり、西武ドームを振り替えさせていただいたという現状があって、なかなか球場の確保が難しいという現状があります。

次に審判です。審判がいないというところで、やはり実際試合となると指揮者になっていただくのは、

オーケストラでいうと、指揮者になっていただくのは、やっぱり審判の方になりまして、「審判の質」「リーグの質」と言われる部分もありますので、なかなか専属の審判っていうのが確保しにくい状況です。

急に人は育たないというところで、これもひとつ課題としてございます。

ただ、これもいま情熱を持って指導していただいているんですが、リーグ発足当初に元パ・リーグの審判部長の永見さんという方から「ぜひ、女子野球を応援したい」とお手紙いただいて現在リーグの審判部長を務めていただいております。

ゆくゆくは女子だけで運営できる女子野球と一緒に目指しましょうというところで、いまトレーニングしていただいているんですが、なかなか審判の質っていう部分は確保が難しいです。

そして、リーグを立ち上げて本当に嬉しかった事としましては、選手の、先ほどのホームランもそうなんですけど、能力がグングン向上しております。特に一年目を見ていただいたときと二年目のレベルっていうのは、圧倒的に違ってきていると思いますので、そういう部分を一緒に見届けていただきたいと思いますし、喜んでいただきたいと思いますという風に思います。

あと二つ目は、仲間が増えていく喜びというので、当然立ち上がる前、立ち上がったときはゼロからスタートしたんですけれども、初年度に60000人を超えるお客さんに来ていただいたり、やはりファンの方が球場に足を運んでいただいて、女子野球を応援するという部分においての仲間が増えていくという喜びを、スタッフ共々感じさせていただいております。



あと、どんどん女子の硬式野球のチームが誕生しているという事と、去年の七夕の日だったんですけれども、ベイコム野球場で試合をさせていただいたときに、野球をあきらめてた女の子が、先ほどのVTRの兵庫スイングスマイリーズのキャプテンの川保の姿を見て、「もう一度わたしは野球をしたい」という事で、たまたま僕はそこに居合わせて、お母さんから中学校にあがるに際して、「男子と一緒に野球をするのは危ないからもうやめなさい」と言われたが、もう1回やりたいという事で、僕もお話させてもらって、これもご縁だったので、お父さんのところに行って、一緒に頭を下げ、もう1回野球を続けてあげられるように、「お父さんもバックアップよろしくお願いします。男子だけで野球をするという環境だけじゃあないですよ」とお願いさせていただきました。

女子だけで野球をする環境もあるという事をお話させていただき、また、ご紹介させていただき、今も彼女は大阪の方で、多分チームに入って野球をまた始めていると思うんですけども、そういう部分で、気持ちにスイッチが入った現場を感じられるっていうのは他にない喜びだなという部分がありますので、このリーグを立ち上げてよかったなと、本当に実感できる瞬間でした。

あと、これはやっぱりテレビで「将来の夢は」って聞かれると、「女子プロ野球選手」っていうのが増え始めてきてくれているので、これは何より我々の糧になるなという部分は思います。

ただ同時に、責任感、責任の重さっていうのも感じておりますので、事業の継続、リーグの発展というところは、僕自身が牽引していかないといけない。代表として牽引していかないといけないということの認識をも強めさせていただいております。

あと、日本女子プロ野球リーグと地域の取り組みということで、兵庫スイングスマイリーズなんですが、現状は選手の寮が大阪の高槻にありますもので、なかなか地域の方との触れ合いというのが、日常生活ベースでは難しいとなってきております。

そこでご相談させていただき、現状、尼崎のベイコム野球場の試合では、シルバー人材センターさんと協力していただいて、力になっていただいているという部分で、7月8日にそのシルバー人材センターの方と対話させていただいたときに、特に選手、女子プロ野球の魅力としては、「失声 駆足の懸命なプレー」と「やさしさ」あと「身近さ 親しみやすさ」の三点ですと。

それを支えるスタッフ側も、それをお客さんに届けたいというところで、単なる勝ち負けの場所っていうことだけじゃなくて、女子野球を応援してもらいたいという部分において、特に地域の大先輩方にそういう部分でお節介をやっていただいて、もっと女子野球選手を応援してもらいたければ、こういう事をしないとけないよ」という部分で、孫を見るようにといたら、ちょっと怒られてしまうかもしれないんですけども、そういう部分で、選手だけじゃなくて、我々スタッフに対しても気づかないところ、人生経験の浅さで分からないところであったりという部分を、どんどんお節介をやっていただきたいというところで、何よりも地域の方から、特にシルバー人材の方から女子プロ野球のファンになっていただいて、応援していただきたいという事で、新たな取り組みもスタートさせていただきました。

更に、これをひとつだけじゃなくて、当然京都の球団もそうなんですが、どんどん・どんどん球場を中心に、そういった活動を広げていきたいなと思います。ぜひ、アドバイス等々をご教授いただければと思いますので、よろしくお願いします。

今後女子プロ野球リーグが目指すこととしては、来年新チームが関西に誕生するんですが、やはりリーグとして2チームだけでなく、やっぱりもう1チームの誕生っていうのが非常に期待されている部分がありましたので、来年からは新たな球団を立ち上げることによって、リーグとして活性化を図っていくという

ころと、あと、このオフシーズン、プロ・アマの交流戦、先ほどの日本地図の中にもかなり強豪のチームがありますので、そのチームと交流を図っていきたいと思います。

ワールドカップをぜひ日本で、なでしこの例もそうなんですけれども、やっぱり世界を見ている競技というところのアピールも、是非このプロ野球が推進する形で行っていききたいので、小中も含めてさせていただきたいと思いますので、本当にその部分においてもご協力いただき、ご理解・ご賛同いただきたいなと思います。

将来の夢はと聞かれて、卒業文集でもそうですけど、女子プロ野球と胸を張って言える女の子がひとりでも増えるという事が目指すことです。

あと、女子の高校の硬式野球大会は、本当の全国大会にしたいと思います。6チームないし、7チームでの全国大会から、女子野球を普及していき、各都道府県に一校ずつでも高校のチームが出来、全国のチームが一堂に会する大会になってほしいな切に思います。女子野球界には、プロアマ関係ございませんので、牽引していききたいなという風に思っております。

将来のこうあって欲しいというイメージは、お母さんがキャッチボールの相手になる社会。お母さんとキャッチボールすることが当たり前となる社会を目指していききたいなという風に思います。

最後に、日本女子プロ野球リーグからのお願いとしまして、兵庫スイングスマイリーズに、地元尼崎の出身の選手がいるんですけれども、背番号12番・中村茜、レギュラーなんですけど、いまセンターをポジションとして守っていますが、いま現時点では二割八分二厘で、全試合出場しています。

本当にガッツ溢れるプレーで、去年は京都に在籍していたんですが、やはりホーム、兵庫というところで、尼崎の方で活躍して欲しいということで、昨年末トレードさせていただきました。

特にチームも応援していただきたいんですが、ご当地の選手がいるというところで、特に応援していただけたらなという風に思いまして、是非女子プロ野球の球場に来ていただいて、彼女たちのプレーをご覧いただきたいと思います。

ぜひ観ていただきたい試合ですけれども、9月28日・水曜日、ベイコム野球場、尼崎記念公園のベイコム野球場で18時からプレーボールしますので、これは前年の観客動員をぜひクリアしたいと考えております。

特に、尼崎のベイコム野球場においては、1350人が今まで頂点だったので、皆さんのお力も借りながら、1500人超をしたいと考え、球場一杯にして、「尼崎盛り上がっているよ」というのも観ている方に対してもアピールしていきたいですし、彼女たちをぜひ応援していただきたいと思いますので、今日はお持

ち帰りしていただく中で、チラシとチケットをご用意させていただいておりますので、ご案内させていただきます。9月28日のナイターに、たくさんお客さんが足を運んでいただけるように、ぜひ応援の程、よろしくお願いします。

ありがとうございました。

豊かな地域づくりのお手伝い。
＜あましん＞

地域の**文化・教育・環境**など、
元気な地域づくりに貢献します。

尼崎21世紀の森づくりを支援します。

※あましんは兵庫県と協定し「企業の苗木の里親第1号」としてスタートしました。



尼崎信用金庫
AMASHIN

<http://www.amashin.co.jp>



20000722(03)
JACC000120000000